実感できぬ親世代

厳寒就活

内定率最低の現場

▶▶下

「どう接したら」戸惑い

1月末、静岡市内で開かれた保護者対象の就活講座。「集団討論で自分を表現できないまま終わってしまい、落ち込んでいる」「娘が就職したくないと言い出した」「卒業間近でも就職が決まっていない」。就活に挑む息子や娘を見ている参加者の、こんな悩みが交錯した。

講師を務めた就活コンサルタント松本保美さん(47)が「実際、就活中の息子や娘にどう接して良いか分からない親がほとんどなのです」と強調すると、保護者らは大きくうなずいた。

バブル崩壊前、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」とされた時代に就職期を迎えた現在の保護者たちは、どうして子どもたちの就活が厳しいか理解できない人も多い。「名の知られている企業に就職しなさい」「まだ内定取れないの」と思わず口に出てしまうこともある。

松本さんは「親の世代の経験は役に立たない。子どもの考えをきちんと知り、行動を見守って応援してほしい」と訴える。

県内の各大学も保護者向けの就活説明会を開いている。県立大が昨年11月に行った説明会には約80人が出席した。1、2年生の保護者の姿も。はやる親たちに、担当者は「内定はすぐ出ず、活動は長期にわたる」「通常は30～40社受ける」などと助言した。

県立大キャリア支援室の田嶋源室長(50)は「採用試験に落ち続けても優しくアドバイスを」と、超就職氷河期に向けての心構えを呼び掛ける。

そうはいっても、就活期を迎えている3年生には不安が募る。「面接ではどこを見るのか」「資格は必要なのか」。そんな疑問を持つ学生と、企業の採用担当が意見交換する交流会が静岡市内で開かれた。

「面接では『仕事を一緒にしてみたいか』と自問自答している。素顔の自分を見せてほしい」と静岡銀行の人事担当者。マニュアル通りの応答は見透かされることも強調した。静岡大の女子学生は「学んだことやこれまでの経験を表現すればいいことが分かった」と合点した。

来春、新卒の扱いを卒業後3年以内の既卒者まで広げる企業が増える。新卒者と既卒者が内定を競い合う構図に、県経営者協会の青木清高専務理事(67)は「失敗を乗り越え、再チャレンジする機会が広がる。厳しい就活の体験は必ず将来の糧になる」とエールを送る。

（この連載は経済部・萩原正司が担当しました）

「就活の正しい知識を」と親向けの講座も登場している＝1月22日、静岡市内